

海澄攻防戦（1678－1680）をめぐる清朝と鄭氏勢力 ：『華夷変態』を中心として

郭， 陽
九州大学大学院人文科学府

<https://doi.org/10.15017/1657873>

出版情報：九州大学東洋史論集．43， pp.108-145， 2015-03-31．九州大学文学部東洋史研究会
バージョン：
権利関係：



海澄攻防戦（一六七八～一六八〇）をめぐる清朝と鄭氏勢力 —『華夷変態』を中心として—

郭 陽

はじめに

康熙一三（一六七四）年から同一九（一六八〇）年にかけて、鄭成功の後継者である鄭經は、平西王吳三桂などが清朝に対して起こした所謂「三藩の乱」に呼応して、台湾から大陸に進軍した。ところが鄭氏勢力は、最初は清軍ではなく、同じく反清陣営に属する耿精忠（元来は清朝の靖南王）・尚可喜（元来は清朝の平南王）に矛先を向け、勢力を拡大していった。鄭氏と清朝との板挟みで窮地に陥った耿精忠は、ついに康熙一五（一六七六）年一〇月に、ふたたび清朝に降伏してしまう。それによって、鄭氏勢力は漸く清朝と直接に対戦することになったが、その後は一連の敗戦を喫し、康熙一六（一六七七）年六月までに大陸での領地を次々と失い、廈門へ撤退せざるを得なかったのである。

このように鄭氏は、反清勢力として共闘体制を組むべき仲間との内訌では優勢であったものの、本来の敵たる清朝との交戦では劣勢に立っていた¹⁾。ただしこうした趨勢の中でも、康熙一七（一六七八）年二月から、廈門において再集結した鄭氏勢力の軍隊は、劉国軒（一六二九～一六九三）の指揮の下で反攻に出て、漳州府を照準に激しい攻撃を仕掛けた。同年六月には、鄭氏勢力は清朝が大軍を配して厳重に守衛した海澄県を攻略し、さらに兵を進めて泉州府城を二

ヶ月ほど包囲して落城寸前にまで迫った。その後、鄭氏勢力は陸上では海澄県を拠点に清軍と対峙し、海上でも清朝の水師と海戦を繰り返して、康熙一九（一六八〇）年二月に清朝の陸海大軍の協同攻撃を受けて廈門を放棄し台湾に敗走するまで、二年間にわたり清朝と攻防を続けたのである。

上述した鄭經の大陸進軍、所謂「西征」の経過については、つとに台湾史家の張莢が康熙一六年の鄭軍の大敗を境に二分し、鄭氏勢力が福建耿氏・広東尚氏との内訌を経て、清軍に敗れて廈門へ退軍するまでの期間を「西征前紀」、その後の海澄県城を攻落し、泉州を包囲して清軍を脅かしながらも、最終的には清朝の水陸大軍の挟撃を受けて廈門を放棄するまでの期間を「西征後紀」と名づけている。張莢はまた、このような鄭氏の「西征」における二段階の戦闘の相違を強調し、特に第二期の清朝との直接対戦で示された鄭氏勢力の頑強さを積極的に評価している²⁰。この第二期の鄭氏勢力と清朝との交戦については、日本で古くは江戸時代の川口長孺をはじめ²¹、明治時代の宮崎来城・大正時代の稲垣孫兵衛などが論じており²²、近年では林田芳雄も検討を加えている²³。また台湾では上述の張莢以外にも、黃玉齋・宋增璋などの論考が²⁴、中国大陆では李鴻彬・張仁忠などの論考があり²⁵、いずれも主に漢文文献に依拠して、その経過と歴史的意義を論じている。

鄭氏勢力の大陸進攻については、漢文文献以外に、当時日本に渡航した華人海商がもたらした唐船風説書のなかにも、関連する記事がかなり豊富に含まれている。これらはしばしば漢文史料にはない独自の記事を伝える貴重な史料群であるが、現時点では三藩や鄭氏勢力の海外貿易、及び琉球と清朝との朝貢関係の成立などの問題を除けば、ほとんど活用されていない。筆者はかつて主に唐船風説書を利用して、鄭氏勢力が清軍の攻撃を受けて廈門に撤退する以前の活動、つまり「西征」の第一段階を中心に考察し、中国沿岸部各地や台湾から来日した華人海商の情勢認識を明らかにしてきたが²⁶、さらに本稿では、鄭氏勢力による「西征」の第二段階を、特に海澄県をめぐる鄭氏勢力と清朝との攻防に焦点を当てて、唐船風説書を活用して論じることにした。

一 鄭經の戦況悪化と清朝による講和要請

耿精忠の清朝降伏によって清軍と直接対決することになった鄭經は、四ヶ月も経たないうちに手中に収めていた福建の五府を全て失い、強力な清軍に恐れをなし、さらに台湾まで撤退しようとしたが、廈門の民衆に留められて、各地の水軍を召還して廈門の防衛を強化し、駐留を継続することになった⁽⁹⁾。

一方、破竹の快進撃で鄭經を大陸から駆逐した清軍も、直ちに廈門に攻撃を仕掛けることができなかった。その原因の一つは、海戦に不可欠な戦艦を短時間で大量に徴集できないことにあり⁽¹⁰⁾、もう一つは、大陸での鄭經の残留部隊を掃蕩する必要があったことによると思われる。鄭經の撤退があまりにも性急だったために、大陸には多くの鄭氏の兵士が置き去りにされてしまった。漳州人の蔡寅は、呪術能力を持つと称して、みずから「朱三太子」と名乗り⁽¹¹⁾、それらの兵士などを糾合して、数万人もの軍勢を集めたといわれる。蔡寅の軍勢は、泉州城を襲撃して、福建の清軍を脅かすまでに至った⁽¹²⁾。この蔡寅による清軍に対する攻撃について、延宝五（康熙一六・一六七七）年七月一二日の、「六番思明州（廈門）船」の唐船風説書には⁽¹³⁾、以下のようにある。

此間又太子会と申候而、大明之末世崇禎帝之第三之王子之由申立、諸方より義兵を揚げ、其勢一万余も可有御座候。内三千余存寄も無之、不慮に泉州之城へ攻め入、大清方を朝之間に追払申候を、大清方より能見申候得ば、漸数千人有之候に付、同日之昼程に大清方大勢に而追払申候得ば、一人も不残皆々逃げ散り申候。大清方は朝之内に存寄も無之に付、少々雑兵被討申候者御座候、太子会之者は一人も死失無御座候。右之通義兵などと申候而、山中海辺に徒党を結び、或は数千人或は万人に及、大清方を乱奪仕候事多く御座候。

これによれば、崇禎帝の「三太子」を推戴する「太子会」の下には、各地の反清勢力が結集し、その兵力は一万ほどに達したとされる。さらに「太子会」の約三千人の軍勢は、早朝に乗じて泉州を急襲し、一旦は城内に侵攻して清軍を圧

倒するほどの強勢をも見せた。その後、昼頃に至って清軍が多数の兵士を出動して、「太子会」の進撃を封じ込めようとしたが、「太子会」の軍勢は全員無事に撤収したという¹³⁾。このように、清朝は「太子会」などの在地反清勢力のゲリラ戦に悩ませられていたのである。風説書では、蔡寅の名前は現れないが、彼が「三太子」を名乗って勢力の伸張を図り、泉州を急襲して無事に撤退したことは、福建総督姚啓聖による朝廷への上奏文¹⁴⁾や『台湾外記』などの漢文野史類の記録とも全く一致している。

このように、清朝側は福建の在地反清勢力による騷擾などの問題を抱えており、水軍の整備も整っていなかったため、廈門の鄭氏を直ちに攻撃することはできなかった。このため対鄭氏作戦の前線で陣頭指揮をとっていた康熙王傑書は、廈門に使者を遣わして鄭氏の招撫を試みている。鄭経の本拠地である廈門から出発した上述の華人海商は、つづいて清朝からの講和要請について、以下のように述べている。

錦舎名代を被出、髪を剃らせ、清朝へ於帰附には、則ち漳州泉州之二府を可宛行、錦舎儀は大明之世を深く被慕事に候間、縦髪を剃り不被申とても不苦候。心儘に安楽被致候へかしとて、大清方之翰林之官李光第と申候泉州人和睦之使者越可申之由、私共出船之刻申参候。此儀はとても同心有之間敷と、諸人申事に御座候。大清方にも錦舎を殊之外六ヶ數存鉢に御座候。第一士卒之軍死、人民之課役皆以変乱之基に而御座候、其上兵糧統き不申候により、和融に仕度本意不浅之由申候。

この海商が廈門を出帆する際に聞いた風聞によれば、清朝側は鄭経がみずからの名代を剃髪させ、帰順の意志を表向きに示しさえすれば、実際に鄭経自身が剃髪しなくても講和を認め、漳州・泉州二府を領地として与えるという条件を提示し、講和の使者として翰林官の李光第が廈門に赴く予定であったという。さらにこの海商は、清朝側は鄭氏との戦闘がさらに長引けば、兵士の損耗や過重な徴発による叛乱が起こることも危惧しており、また兵糧の補給も難しくなっていたため、講和を結ぶ意欲がかなり高いとも伝えている。その一方、廈門では鄭氏勢力は清朝の講和要請を拒絶するだろうという予測も流れていたという。この風説書を見るかぎり、鄭氏勢力よりも、清朝の方が講和締結に積極的だった

という印象をうける。

ここで華人海商が伝えた清朝からの講和要請については、清朝の官撰史書にはまったく該当する記録がなく、それと対応すると思われる記述が確認できるのは、私撰の野史である『台湾外記』だけである。それによれば、康熙王は李光第ではなく、僉事の朱麟・莊慶祚を廈門に遣わして鄭經に帰順を促したが、鄭經の返事は、鄭氏勢力を朝鮮と同じように扱うならば、講和談判に付く可能性もあるが、今ではなお清朝とは一戦を惜しまないとの内容であったという¹⁶。

つまり、『台湾外記』においては、今回の交渉は、鄭氏に対する講和要請ではなく、鄭氏の帰順を促す一種の警告とも見られる清朝の一方的な通告として記述されている。それとは対照的に、廈門から出發した鄭氏の御用達海商の報告では、経済的に圧迫され、過重な徴発による内乱の危機をも避けかねないと判断したため、戦争状態を早期に終結しようとする清朝は、鄭經自らの剃髪にも拘らず、そのうえ泉州・漳州二府をも鄭氏に譲渡するという非常に有利な条件を提示して、翰林の官員を廈門に遣わし講和に当たらせる用意をしたが、それに対して鄭經側はきつと同意しないだろうとしている。

長崎に來航した華人海商が、出帆地の政治勢力に有利な供述を行う傾向があることについては、すでに前稿においても指摘したが、上記の講和をめぐる華人海商の報告もその一例といえよう。つい七月一〇日に、「十一番思明州船」で來日した華人海商も、次のように鄭氏側に有利な情報を伝えている¹⁷。「〔内は筆者補足、以下同様〕」

「康熙王が鄭經を撃破したことによって」福州の靖南王弥機を被奪、功なきものと成、戦場之首尾も殊外悪敷御座候に付、ケ様に而は大清方にも、とかく身之置所は有之間敷存、錦舍方へは不参候得共、当六月初に広東潮州之劉伯爺方へ参候而、又々大明に罷成可申之内談相極め申候。劉伯爺儀は、元より時節も有之候得かしと相願申候所に、右之首尾御座候により、即刻錦舍方へ帰附之一左右申來候に付、錦舍悦申候而……右之通に候はば、惠州潮州は又々無程錦舍手に属し可申と廈門に而万民共申候。

これによれば、清朝に投降した靖南王耿精忠は、康熙王に軍権を奪われ、清朝側に居場所が無くなったため、潮州の割

拠勢力である劉進忠に身を寄せ、また清朝に叛旗を翻す計画を策しているという。また劉進忠も鄭經に帰伏の意を表明したため、惠州と潮州はふたたび鄭經の勢力下に帰すると、廈門の人々は語っているというのである。さらに当該の華人海商は、広東の情勢についても、「吳三桂方と被挟申様に罷成申候は、平南王も又々大明に成申より外は御座有間敷と皆々申事に御座候」と、平南王もまた清朝を裏切り、反清勢力に付こうとしているという風聞を紹介し、「右広東之様子により錦舍方勝利を得申候は、又漳州泉州之儀錦舍手に属し可申事、可容易と諸人共に申事御座候」と、そうなれば鄭經は福建での失地も容易に恢復できるだろうとも述べている。

また延宝五年一二月三日、鄭氏勢力に属し、浙江寧海県の臨門都（現在の象山県南部）に駐屯する「朱都督」¹⁸が派遣した、「二十九番普陀山船」に搭乗していた華人海商も、「潮州府只今は錦舍手に罷成申候、依夫潮州府大清方之守官劉氏之者漳州府に引きのき罷有候」と¹⁹、鄭經が潮州府を攻略し、清朝に投降した劉進忠は漳州に逃走したと伝えている。

実際には、潮州に駐在する劉進忠は、鄭經の大敗を受け、既にこの年の三月に清朝に帰伏していた²⁰。これを受けて、清朝は耿精忠に潮州への進駐を命じ²¹、耿精忠は暫く潮州に駐屯することとなった。さらに六月には、平南王尚之信も清朝に投降し、劉進忠が清朝に投降した後も、ひそかに吳三桂に救援を求める書簡を送っていたと告発した²²。このため清朝は、劉進忠を本拠地である潮州から強制的に福州に移したが、その際には、劉進忠が潮州に駐屯する耿精忠と密議して、清朝に反旗を翻そうとしているという情報も、清朝朝廷に寄せられている²³。華人海商が伝えた、劉進忠・耿精忠の不穏な動きは、このような潮州の不安定な政治状況を反映したものと見えよう。但し、実際には鄭氏勢力が潮州を奪還したという事実はなく、廈門や鄭氏配下の華人海商は、事実とは異なる、より鄭經に有利な情報を報告していたわけである。

その後、延宝六（康熙一七・一六七八）年二月九日付け「一番福州船頭薛八官船」風説書は、林家が所蔵する『華夷変態』の原本には収載されておらず、島原松平家本の巻一に収められている。船頭の薛八官が、「福州之内定海と申所

江しのび罷有候」と、定海より密航して来日したと供述しているが、そこでは延宝五年一二月に、清朝から講和の使者が廈門へ派遣されたことが記録されている²⁴。

福州康親王より去年一二月初比に、泉州之太府之官一人並興化府之太府之官一人、両使官として廈門江指下し、錦舎と和睦之使官に罷越候……泉州府漳州府二府を其方之領地に可致之条、同心可有之由申来候得共、錦舎合点仕不申、右二府に興化府を相添候はば、如何様とも可仕と返事申候、其後福州より如何様とも不申参候に付、只今迄は相替義無御座候。

この記事では、清朝が派遣した使者が、泉州・興化府の官員であるとされ、剃髪に関する言及もないが、そこに記された講和条件は、前述の記事と同じく、泉州・漳州二府の譲渡は主な条件となっている。しかし鄭氏側は、泉州・漳州二府に加え、興化府の領有も認めれば、講和に応じると回答したため、福州の清朝当局からの返事はなかったという。この講和交渉については、『聖祖実録』や漢文の野史にも関連の記載があり²⁵、それによれば、臨時の泉州知府張仲挙・興化知府卞永蒼とともに、泉州の郷紳黄志美・監生呉公鴻も使者として廈門に派遣され、鄭氏勢力が大陸沿海から台湾に撤収すれば、今後は清朝の朝貢国である朝鮮の事例に準じた待遇を認めるという講和条件を鄭経に伝えたと言われる。しかし、鄭氏の重臣である馮錫範は、あくまで泉州・漳州・潮州・惠州四府の譲渡要求に拘り、両方の談判は終に決裂したのである。

なお「一番福州船」の海商は、潮州の状況に関して、「去年は広東之内潮州府、重而手に附け申候得共、又々福州之靖南王広東へ下り候、右潮州府を取かへし、只今潮州府大清方に成申候」と述べ、一旦鄭氏勢力の傘下に入った潮州が、ふたたび耿精忠に奪還され、清朝の領地となったとして、従来の海商たちの供述を修正している。

このように、鄭経が清朝に大敗して大陸から廈門に撤退した後の情勢については、延宝五年の、①「六番思明州船」・②「十一番思明州船」・③「二十九番普陀山船」、そして翌六年の、④「一番福州船頭薛八官船」の海商からの供述が残されている。①・②は鄭氏の本拠地である廈門から出航し、③も鄭氏の部将が派遣したもので、④も鄭氏の統制下

にあった定海から来日した船であった⁽²⁶⁾。これらの海商は鄭氏勢力との関係が強かったと考えられ、彼らの供述も明らかに鄭氏勢力に有利な情報を伝えている。①では、福建の在地勢力「太子会」による清朝への叛乱が伝えられ、②・③でも、一旦清朝の勢力下に入った潮州地方がふたたび鄭氏側に帰服したと述べている。「朱三太子」と自称する蔡寅の活動や、潮州における劉進忠の不穏な動向については、漢文史料にも関連の記載が確認される。華人海商の供述するように、潮州が清朝の支配下から離脱するまでには至らなかったものの、これらの供述は、当時の情勢の一面を反映したものと見えよう。

その一方、①・④が伝える清朝からの講和要請は、確かに漢文史料にも対応する記述が見られるものの、講和の具体的な条件について、風説書と漢文史料との間では、大きな隔たりが見える。上述したように、①・④ともに停戦の条件として、清朝は泉州・漳州二府の譲渡を提示したとしているが、これに対し漢文史料によれば、清朝は鄭氏に大陸沿海からの撤退を要求し、台湾に撤収すれば朝貢国朝鮮の例に準じて待遇するとはしたものの、鄭氏が要求する大陸領土の譲渡は認めていない。清朝が支配下に収めた二府を、容易に鄭氏に譲渡するとは考えにくく、おそらく鄭氏勢力は、自らの領土要求を、恰も清朝側から提示した条件であるかのように、支配下の地域において喧伝したのではないか。

康熙一八（一六七九）年四月四日、福建安溪武学生員で、甥の李光地（一六四二〜一七一八、内閣学士）と共に一族の自衛組織である「団練」を率いて鄭氏勢力に抵抗した李日成は、朝廷に対鄭氏作戦の戦略建議書「平海機宜」を奏上した。その中には「招撫を杜絶せよ（杜招撫）」との一条があり、その理由として、「閩南の」狡猾な民は、叛服常なく忠心が期待できず、一度朝廷からの招撫のうわさを聞くと、直ちに海賊（鄭氏勢力）が勢力を盛り返すと見なし、群れをなして鄭氏に追従しようとする」と述べ⁽²⁷⁾、鄭氏に対する招撫の不可を強く主張している。また、後に福建水陸提督に命じられた楊捷（一六二七〜一七〇〇）も、「福建人は」以前は鄭氏に従属して、今でも秘かに通同している」と述べ⁽²⁸⁾、蔡寅等の在地反乱勢力の動きが活発化する中で、福建人に対する不信任感を露わにしている。

一方で、鄭氏勢力にとっては、清朝が泉州・漳州二府を割譲する可能性を喧伝すれば、そこで活動する反清勢力を鼓

舞することにもなり、内部的な求心力を高めることも期待できるため、支配下の地域において意図的に都合の良い情報を流し、そのような情報で、華人海商を通じて日本に伝わり、唐船風説書に記録されたのであろう。

しかし、これらの風説書が記すように、清朝が鄭氏の領土要求をそのまま受け入れるわけはなく、和議交渉はたちまち暗礁に乗り上げた。年が明けて延宝六（一六七八）年になると、鄭経から軍事指揮権を一任された劉国軒の強い指導力の下で、鄭氏勢力は清朝との決戦体制を再構築し、再度の大陸反攻作戦を開始したのである。

二 唐船風説書が伝える海澄包囲戦

（１）漢文史料に記された海澄包囲戦

本節では、漢文史料に記された海澄包囲戦の経過を、関連する先行研究を参照して概観しておきたい⁽²⁹⁾。康熙一七（一六七八・延宝六）年一月二五日、廈門に撤退した鄭経は、劉国軒を中提督に拔擢し、「尚方劍」を与えて諸軍の統帥権を彼に委任した。二月九日、国軒は水軍を率いて廈門より出陣、福建総督郎廷相（？～一六八八）、福建水師提督海澄公黄芳世（？～一六七八）、総兵黄藍などが嚴重に防備体制を敷いた漳州湾沿岸を襲撃し、一二日・一八日・二三日と連戦連勝を収め、清朝の守備軍に打撃を与え、鄭氏勢力の士気を高めていた。その後、福建提督段応挙（？～一六七八）などが泉州や潮州から来援したが、劉国軒は水軍の機動性を存分に發揮して、数万もある清朝の陸軍を翻弄していた。三月一日、劉国軒は策謀をめぐらして漳州城外に駐屯する黄芳世軍を大破し、一八日には段応挙軍を黄藍などが守衛する海澄県城まで追いつめた。その後、鄭軍は半島状をなす海澄城周辺の地理的条件を巧妙に利用し、大陸と連続する部分を横切る堀を穿ち、海水を入れてその城を孤立させることに成功した。

やがて海澄県城に撤収した清軍は三万以上にも達し、城壁を強化して防備を固めたが、劉国軒は包囲網をさらに嚴重にし、河川の多い地形を活用して、清朝援軍の騎兵部隊の突撃を遮り、兵糧攻めの作戦を取っている。多数の清朝兵とともに、一省の最高軍事司令官たる提督までも海澄県城に孤立し、敵軍に包囲されるにいたったことは、清朝の朝廷にも大きな衝撃を与えた。康熙帝の敕命を受けて、総督郎廷相は各地の兵力を集中させ、懸命な救援作戦を何度も繰り返していたが、鄭軍の激しい反撃に遭い、海澄城の至近距離にまで迫りながら、終に鄭氏勢力の包囲網を突破することができなかった。このように、戦況が膠着化するにいたり、五月になると、康熙帝は総督郎廷相・巡撫楊熙・提督段応挙の解任に踏み切り、新たな総督として姚啓聖（一六二四～一六八三）を、巡撫として呉興祚（一六三二～一六九八）を起用し、さらに福建で任官歴のある江南提督楊捷を福建提督に転任させた。姚啓聖は、着任早々直ちに海澄清軍の救出作戦を発動し、総力を挙げて鄭氏勢力に激しい攻撃を仕掛けたが、やはり地の利を得て、且つ優れた火器をも装備した鄭軍に撃退されてしまった³⁰⁾。さらに制海権が鄭氏に握られていたため、補給が断たれた海澄県城内では、餓死する兵士も続出し、清軍はしだいに戦闘能力を失っていった。六月一〇日、包囲の開始から八三日後、海澄県城は終に落城したのである。

（2）普陀山方面に伝えられた鄭軍大勝の風聞

前節では漢文史料により、鄭氏勢力による海澄攻城戦の経過を概観した。それでは唐船風説書では、華人海商はこの包囲戦の状況を、どのように伝えているのだろうか。まず延宝六年三月二〇日、「南京近所」において「韃靼方海廻りの兵船に被追申」と、清朝海軍の取締を逃れて来日した、「二番普陀山船」の海商は、以下のように語っている³¹⁾。

漳州之内海澄県と申所、韃靼方海澄公と申大官、守護仕要害之地に而御座候を、去る二月中旬に、錦舍軍兵数万、則海澄公之人数に似せ、旗印其外軍兵之模様、海澄勢に粧ひ、城中江紛れ入申候得ども、城中外之勢之思ひ寄無之

候処に、俄に錦舍勢起りて、海澄公之人数三千余打取申に付、城中あわて、海澄公は漸漳州へ逃のき申候、夫により海澄県無難錦舍手に入申候、漳州之城には韃靼之大将段提督と申者に而御座候、右海澄公則一所に罷成居申候を海澄県取申候、錦舍勢其足に而漳州を取囲、今程漳州之城へ四里程攻寄せ罷在候、大形は落城可仕風聞に而御座候。この海商が伝えるところによれば、鄭経は二月中旬に、清軍の装束を纏わせた配下の兵士を海澄城内に潜入させ、それで内外呼応して清朝の海澄公勢を三千人ほど殺害し、海澄公自らをも漳州まで駆逐して海澄城を占拠した。これに対し海澄公は、漳州に駐屯する清軍大将段提督と合流して、海澄城の奪回を目指して出動している。しかし鄭経は清軍を追撃して漳州を包囲しており、漳州城は間もなく落城するだろうというのである。

上述のように、康熙一七年二月九日から三月一八日にかけて、劉国軒が率いる鄭軍は、確かに漳州湾沿岸の清軍を襲撃し、海澄公黄芳世の軍勢に大きなダメージを与え、さらに段応挙を海澄県城内に包囲していた。しかし、この風説書が聴取された三月二〇日の段階では、海澄ではまだ段応挙が籠城しており、漳州城が鄭軍に包囲されたという事実もない。恐らく二月中旬以降、三月上旬までの鄭氏の捷報が、江浙地方に伝わる途中で誇大に喧伝され、それを受けて特に普陀山方面においては、「又々錦舍之勝利つのみ可申と諸人申事に御座候」と、鄭氏に有利な風聞が広がっていたのであろう。

(3) 海澄包囲戦に関する台湾海商の報告

福建前線とは離れた普陀山発の海商にくらべて、鄭氏の本拠地である台湾からの海商は、より信憑性の高い情報をもたらしていた。延宝六年六月二日、「四番東寧船」で台湾から来日した海商は、海澄城包囲戦の経緯を具体的に報告している⁽²⁾。

まず劉国軒の統率の下で、鄭軍が漳州湾沿岸において展開した緒戦については、次のようにある。

錦舍方之大將右武衛之官劉國賢と申者、軍兵三万余引率致し、去二月十八日に海澄県勢と令対陣、一戦仕申候所に、存之外劉國賢得勝利を、海澄県方之諸將並に軍兵共に千余打取、其上馬を四五百疋取申候、其後三月十二日、又は十八日両日に重而合戦仕申候所に、馬二千余取申候、将兵共に又数千打取申候、錦舍方之勢は、損失之儀わづかの事に御座候而、数度之戦に度々利運得申候。

右武衛劉國軒は三万程の軍勢を率いて、二月一日に清軍と対陣し、一戦を交えたところ、意外にも兵力に劣る鄭軍が大勝し、清軍に大きな損失を与えた。その後の三月二日、一日にも双方が接戦し、清軍は大量の人馬を喪失したが、鄭軍の損亡は軽微であったという。上述のように、鄭軍は漳州湾に上陸して一連の作戦を展開したが、特に二月一日には漳州・泉州間の交通要路である江東橋を切断し、当時布政使であった姚啓聖の子で、勇名のある姚儀なども撃退している³³。また三月二日には海澄公黃芳世軍に壊滅的な打撃を与え³⁴、一日日には段応挙を海澄城内に封鎖していた。つまり、台湾海商が伝える上記の戦闘の日時は、漢文史料に記録された主要な戦闘の日時と全く一致しているわけである。

とりわけ福建提督段応挙が海澄城に封じ込められた経過については、台湾海商は非常に詳細で、かつ生き生きとした供述を行っている。まず段応挙が泉州から海澄に來援した状況について、この東寧船風説書には、以下のようにある。

大清方段提督と申者、教府兼管之惣將に而御座候付、兼而は泉州府に罷在候所に、海澄県稠敷手づまり申に付、泉州より、人数三万余も引率致し、海澄県之救ひに出張仕候を、錦舍手之劉國賢勢、中途に而眞中を突ききり打破り申候に付、泉州勢散々に被破、半分は元之ごとく令退城、半分は段提督令引率、海澄県江入城仕候。

福建一省の清軍を統括する提督段応挙は、元々泉州府に駐屯していたが、海澄での清軍の敗報を知り、救援のため三万の軍勢を率いて泉州から海澄に向かった。しかし、その途中で劉國軒の急襲に遭い、段氏の部隊は二つに分断され、一部は泉州に撤回したが、ほかの兵士は段氏とともに海澄城に入城せざるを得なかったという。漢文史料では、段氏が二月中にすでに泉州より漳州に到達し、三月一日に鄭軍と対陣した結果、海澄城に敗走したと記されているが³⁵、風説

書においては、その間の事情が簡略化され、段氏が泉州から来援し、最終的に海澄に逃げ込んだことだけが伝えられている。

それに続いて、この風説書では、鄭軍が濠を造成して海澄城の清軍を孤立させたことについて、次のように記されている。

依夫劉国賢存候には、海澄県勢弥多勢に罷成候間、及合戦に候共、人数のみ多く致損失、無詮事に候とて、人民に課役を宛、一日夜之内に、海澄県を取囲、堀をほらせ申候、其堀はば一丈八尺深さも一丈八尺、人民一人に三尺四方宛掘り申に相定、一日夜に堀成就仕申候得ば、はや海水に通じ、中々一人も海澄より通路罷成不申候。

劉国軒は、海澄城を強攻突入すれば、多数の清軍の抵抗により、大きな損失は免れないと考え、周辺の人民を徴発し、一人ごとに三尺四方ずつを掘らせ、海澄県を囲む、幅・深さ共に一丈八尺の濠を造成し、海水を引き入れて海澄城を封鎖したという。管見の限り漢文史料では、濠の造成過程やその規模に関する描写は全くなく、それに対してこの風説書では、その真否は別として、きわめて具体的な状況を伝えている。

さらに、上述の包囲戦を可能にした海澄城の地理的な条件や、包囲戦の影響についても、台湾海商は詳しく解説している。

海澄之儀元より一方は海をうけ、其海水城之廻り半分ほど迄、常に河入御座候、相残半分は堀も無之陸地に而御座候、其廻一里余も可有御座候、其所を右之通一日夜にすぎと堀りに仕申候故、曾而軍兵之通ひ絶果申候、則ほしころしに仕申覚悟に御座候、追付落城間も御座有間敷候。

海澄城は、周囲一里の半分ほどは海に囲まれ、残る半分は溝や濠がなく陸地と続いていた。そのような地形を利用し、鄭氏勢力は短時間で城を取り囲む濠を完成し、城内外の清軍の連絡を遮断した。そのうえで乾し殺しの戦術を取っているため、海澄城は遠からず必ず落城するだろうというのである。

また、この風説書には、漢文史料には全く見られない、海澄に籠城する段応挙と、包囲戦を仕掛けた劉国軒との、次

のような対話も記録されている。

依夫段提督より劉国賢方へ申遣し候には、古来より籠城落城多く有之候得共、一方は何れ之道にも生路を明け置事に候に、只今ヶ様に而は不残餓死仕より外無之候、ヶ様之軍法や有之哉と申遣し候得共、劉国賢承引仕不申、返答申候は、我等は法も不法も不存候、只不残打取申を、本意と致し候とて、一圓に合点仕不申候。

窮地に陥った段応挙は、劉国軒に対して、古来から城を包囲する際には、必ずどこかで逃げ道を設けるものだが、今回のように城全員を一人も逃がさずに餓死させることは、軍法に背く行為ではないかと批難している。これに対して劉国軒は、たとえ軍法に合わなくとも、清軍をすべて討ち取ることつもりだと回答し、包囲網を少しも緩めなかったという。ただし『台湾外記』巻八によれば、劉国軒は使者を派遣して段応挙に投降するように説得したが、清朝に忠義をつくす覚悟の段応挙は直ちに拒絶したと伝えられている³⁶。この記事も含め、ほとんどの漢文文献では、官撰か野史かを問わず、段応挙は海澄落城の際に自ら縊死したため、彼の軍事能力に対する評価はともかく、清朝への忠誠については積極的な評価がなされている。一方で、台湾海商の間では、まだ海澄が落城していない段階で、段氏が劉国軒に対して、包囲網を緩めるように請願していたという風聞が取り沙汰されていたのである。

この台湾海商は、劉国軒による包囲戦が長期化するなかで、「只今海澄艱難儀最中にて御座候」と、海澄の清軍は危機的狀況にあり、このため「又泉州方より定而見続き之勢可有候」と、清朝は泉州からさらに援軍を送るだろうと予測している。ただし、「錦舎より王提督と申者に人数三千ほど相添、泉州より海澄江之中途をさへぎり罷有候に付、両城曾而通路罷成不申候」と、鄭経も泉州の清軍の来援に備えて、三千人の兵士を統率する王提督を派遣して清軍の救援を遮断しようとしており、このため「追付落城疑無御座候有間敷候」と、海澄の落城は免れないだろうと断言している。

以上、ここでは台湾海商の風説書に記された海澄包囲戦の経過を、漢文史料と対照して分析を試みた。劉国軒が指揮を取るこの一連の戦闘については、台湾海商は非常に具体的で、且つ臨場感のある報告を行っている。その内容を漢文史料と比較すると、海澄包囲戦に至る清朝と鄭氏の攻防の経緯は、比較的正確に日本に伝えられていたことが分かる。

なお海澄包圍戦の戦況をめぐって、台湾海商が鄭氏の優勢と清朝の窮状を伝えているのに対し、清朝統治下にあった広東からは、より清朝に有利な情報もたらされている。延宝六年六月中旬頃、「尤平南王手下之商共」が乗船する「七番広東船」が長崎に入港したが、その風説書では、清朝による対鄭氏作戦をめぐる次のような報告を記している³⁷。

福州に居城いたし候康熙王も、向後錦舍罷有候廈門打取申候儀は容易存申、其上福州に越申候阿蘭陀人に申付、船数多く招寄せ、東寧を攻取申覚悟に御座候由承申候。

この広東船の海商は、福州に駐在する康熙王は、海澄城は言うまでもなく、鄭經の本拠地の廈門をも容易に攻略すると予想し、さらに福州に来航するオランダ人にも協力を命じ、多数の戦艦を集めて、台湾を攻撃する計画を立てていると述べているのである。「七番船」が出航した時点では、海澄はまだ落城しておらず、漳州方面の情勢は非常に緊迫していたが、すでに清朝の支配が確立していた広東においては、清朝がオランダ人の協力も得て³⁸、さらには廈門を恢復し³⁹、台湾まで攻略するであろうという観測がなされていたのである。

(4) 海澄落城をめぐる情報の諸相

延宝六年六月二二日、海澄攻城戦の前線により近い廈門から来航した「十番思明州船」の海商は、清朝・鄭氏の攻防について、より詳しい情報を日本に伝えた⁴⁰。まず海澄城の包圍や、段応拳による劉国軒への包圍解除要求については、先述の台湾海商とほぼ同じような供述が記されている。

戦況情報の外にも、この風説書には、海澄落城に関する情報伝達をめぐる、次のような興味深い記事も含まれている。

然処に私共船、先月廿四日に思明州より出船仕、福州近くにて逆風に逢及難儀候故、無是非福州領之内澄海と申所に、幸錦舍手下之楼船中鎮之官簫琛と申者、海辺をおさへいたし罷在候に付、其所に順風を相待、還り居申候、左候得ば往来之者之伝には、海澄県之城、先月廿日に落城仕之由承申候へども、私船同月廿四日に思明州を出船仕候

へば、海澄県も思明州に程遠く無之、殊に錦舍居城之地にて御座候へば、切々海澄県之様子も申来儀に御座候故、海澄「澄海」にて承申候ば、凡風説之儀と察申候。

この廈門海商は、五月二四日に廈門を出発して北上したが、福州周辺の海域で北風にあつて難航し、福州の澄海に進駐していた、同じ鄭氏勢力に属する簫琛のもとに投じて順風を待つことにした。澄海は福建・浙江交界の沿海地方に位置し、当時、福州閩江河口の清朝海軍を監視・阻止するための、鄭氏艦隊の基地となっていた。この澄海においては、海澄城が五月二〇日に陥落した、という情報が伝わっていた。しかし海澄の戦況に関する情報は逐一鄭經の駐屯する廈門に報告されていたにも関わらず、廈門海商が出航した二四日までに海澄落城の報は全く届いておらず、この情報は根拠がない風聞と考えられるという。そこでは、海澄が実際に落城した六月一〇日の半月ほど前に、全く事実と反する落城の情報がすでに伝播している。このような風聞は、前線から離れた澄海で自然発生的に流れたのかもしれないが、澄海に駐在する鄭軍が、自軍の優勢を誇示するために、実際に海澄が落城する以前に、故意に捷報を流布させた可能性も否定できない。

廈門海商は、このように出航時点では海澄の落城は確認できないとしながらも、鄭氏勢力の将来の展望については、次のように非常に樂觀的な見方を示している。

福州も韃靼の仕置宜無之候に付、官民ともにさわざ申由粗承申……兼々錦舍存知被申候海澄県之城を攻取、すぐに漳州泉州に発向いたし、数多之軍兵を令引率、広東を打取申ため馮侍衛之官を惣大将に被申付覚悟に御座候……吳三桂勢も殊之外つよく有之候へば、大明之利運も別条御座有間敷と諸人取沙汰仕候。

福州では、清朝が人心を得られず、官民ともに動揺している。鄭經は、まず関係の深い海澄を攻め落とし、その後直ちに漳州や泉州に進撃し、さらに多数の軍兵を統率する馮錫範を派遣し、広東地方を恢復させる計画をも練っている。そのうえで吳三桂の軍事活動とも呼応することにより、「大明」の勝利が期待できると人々は取り沙汰しているという。鄭氏の勢力範囲より出航した廈門海商は、清朝支配の動揺と反清勢力の拡大により、明朝の復興が実現するという展望

を示していたのである。

(5) 唐船風説書所収の劉国軒報告書

従来の海澄城包圍戦に関する研究は、もっぱら『聖祖実録』を始めとする官撰史書や、『台湾外記』を始めとする野史を史料としていた。鄭氏政権みずからが残した記録は、その降伏に際し処分され、あるいは清朝の禁書政策のもとで抹消されたと思われる、ほとんど現存しておらず、鄭氏側の公的文書に依拠して、鄭經の「西征」の経過を検討した研究もなされていない。ところが『華夷変態』には、華人海商がもたらした、劉国軒が鄭經に送った報告書の写しが収められている。これは従来の史料状況の欠を埋め、清朝や野史の著者らとは違う、海澄包圍戦の当事者による記録として、貴重な意義をもっている。以下、この報告書に記す海澄包圍戦の経過を紹介してみよう。

「十一番東寧船」の風説書は、延宝六年六月二三日に作成されている。これによれば、「十一番船」は六月一日に台湾より出発、東北風に遭ったため、六日に廈門に寄港し、そこで八日間ほど順風を待ち、一四日に廈門を出帆して来日したという。同船が廈門に寄港していた期間には、まさに海澄陥落の時期と重なる。当時、海澄を攻落した劉国軒からの報告が廈門に送られ、その写しが「十一番船」によって日本にもたらされたと考えられる⁽⁴⁾。この報告書の信憑性を完全に確認することは難しいが、「十一番船」が出航した場所と時期から見て、廈門にもたらされた報告書の写しを入手することは十分に可能であったと思われる。風説書に収められた、六月一日の報告書の和訳と原文は次の通りである。

「六月十一日、劉国賢より錦舍江遣し申候書簡写之和ヶ」⁽⁵⁾

九日之夜五つ過に、城内之韃靼人唐人韃靼之物頭並士卒共、数千人如案の西之門より林坑山之方江逃出申候を、左虎衛殿兵鎮中營等之兵卒共道を遮り打取申、敵勢其数知れ不申候、其外降参仕候ものども、十日之朝臣方江召具し来り申候に付、臣則銘々に令安堵……併只今外城は手に入申候得共、内城には段応挙穆都督籠り罷在候故、臣只今

一つには降参いたし候様にと申遣、一つには兵卒を遣し攻申覚悟に御座候、往々は必攻取可申候、降参致させ候段……（「恢復海澄県各地方報冊」至初九夜定更後、城内満漢酋卒数千、果出西門、由林坑山而遁、被左虎衛殿兵鎮中営等兵欄住、被殺死者、不計其数、其有倒戈投降者、俱于初十早、解赴到臣、臣另行安插……但今外城已得、其内城係段応挙穆都統拠住、臣現在一面招諭、一面調遣進取、前必克復收降⁽⁴³⁾）。

六月九日の深夜、海澄城内の満洲人・漢人将兵数千人は、西門より出て林坑山方面を通じて脱出しようとしていた。しかし、彼らの動きを事前に把握した劉国軒の指示を受け、左虎衛何祐は、海澄を脱出した清軍を迎え撃ち、多数の兵士を殺害し、降伏した者は国軒のもとに送致した。外城の陥落後も、内城では段応挙・穆都統が抵抗を続けたが、劉国軒は彼らの投降を勧告するとともに、攻城の準備も進めた。内城に残った清軍が降伏し、海澄を恢復するのも時間の問題であるという。

海澄外城の陥落に対し、漳州方面の清軍も勿論これを座視してはいたわけではない。彼らの動向について、一三日の劉国軒の報告には、次のようにある。

「十三日の飛札之写和ケ」⁽⁴⁴⁾

然処に山上に罷在韃靼勢、十日之日騎馬歩兵数千に而、岳廟下之田之中に人数を出張仕、助勢之体を見せ申候、臣等も則一方に而は諸備に申合、備江を立仕寄迄罷出、支江罷在候、一方に而は……十日之夜五ツ時分に打立申、会約之处に張氏之城守使を以て、うらがへり可仕由、相図密約仕候故、其期に攻寄せ、只一攻に攻取申候、其後段応挙並穆希虎等之行衛を吟味仕候処に、偽朝之都統段応挙とも縊死仕候、黄藍儀者未行衛知れ不申候、県官儀者則県衙に罷在候、只今私制札を出し、万民を安堵仕らせ申し候（「十三日抄報」而山上狡虜、初十日、猶出馬歩数千、至岳廟下田中站隊、遙張応援、臣等乃一面知会各鎮伝隊伍、炤旧站墻堵御、一面……訂于初十夜一更進兵、適有張城守、差人密約、為接応、遂至期進、一鼓收復、查段応挙及穆希虎等、偽都統段応挙俱已自縊、黄藍未有踪跡、県官現在県衙、今臣即出示安民⁽⁴⁵⁾）。

六月一〇日になると、城外の清朝援軍も騎兵・歩兵数千人を以て隊列を組み、遙かに内城に籠城する清軍に呼応するように動き出した。それを受けて劉国軒は、配下の軍隊に防戦を命じるとともに、一〇日夜の進撃計画を決定した。その際に、海澄城内の張姓の清朝將校が、密かに人を遣わして鄭軍に内応する意を伝え、彼の協力によって、内城をたやすく陥落させることができた。劉国軒らは入城後、段応挙・穆希虎の行方を搜索し、二人がみずから縊死したことを発見したが、黄藍の行方は確認できず⁽⁴⁶⁾、清朝の海澄県知県はまだ県衙におり⁽⁴⁷⁾、国軒は直ちに城内人民を安撫するための告示を發布したというのである。なお漢文史料では、管見の限り「張城守」の内応に関する記録は全く見られない。この点をはじめ、劉国軒の報告書は、海澄落城の経過について、中国側史料にはない事実関係を述べている点において注目値する。

三 泉州包囲戦の失敗と戦況の膠着化

鄭氏勢力は、海澄城を攻略すると、直ちに泉州方面に進軍していった⁽⁴⁸⁾。まずは漳州と泉州の間にある長泰県や同安県を攻略し、六月二三日には泉州府城を包囲した。その後、鄭氏勢力は泉州府所轄の諸県を攻略するとともに、泉州城に対して激しい攻撃を仕掛けた。一方で清朝は浙江省や江西省から陸路で泉州に援軍を送り、その外にも福州から水軍を派遣して鄭軍を牽制している。ところが海上では、上述の鄭氏水軍の部将簫琛が清朝水師総兵林賢の艦隊に敗れ⁽⁴⁹⁾、廈門の危険を感じた鄭経はやむをえず泉州前線の劉国軒を召還した。八月末に至り、劉国軒は泉州の部隊を撤回して漳州方面の防衛に転じた。その後、漳州・泉州沿海において、劉国軒と清軍とは小規模な衝突を繰り返していたが、戦局が膠着化してしまい、双方が睨み合いを続けることになった。このような戦況の展開を、長崎に来航した華人海商たちはどのように伝えたのだろうか。

(1) 福州方面における泉州落城の風聞

まず延宝六年九月一〇日の「二十三番福州船」の風説書を見てみよう。この船は「私船之儀、錦舍領内より正月福州へ参」とあるように、鄭氏支配地から敵地の福州に密航した船であり、当時の福州の状況を、次のように伝えている⁵⁰⁾。

福州之儀……併軍兵殊之外乏く、万民商売之経営も薄く罷成申候、此時に乘じ、海手より大軍を指向申候ば、福州之儀心安攻取可申躰に御座候得共、今程錦舍事漳州泉州方之軍に取紛罷在候付、存ま々軍勢を福州へ向申候事も不罷成躰に御座候……私福州出船之時分、船便に承申候には、泉州も無難錦舍方へ攻取申由、風聞に承申候、泉州さへ取申候ば漳州儀は自ら手に入可申由申候。

福州では、駐屯軍が泉州・漳州の救援に派遣されたため、兵力不足が深刻化し、商業も戦乱のせいで不況に陥っている。この時を乗じて海上から攻めれば、福州も容易に攻落されるだろうが、なにぶん鄭経の軍隊は泉州・漳州方面に牽制され、福州を襲撃する余力はない。この海商は出航の際、海上を往来する「船便」により、鄭軍がすでに泉州を攻略したという風聞を聞いたといい、泉州が落城したとすれば、福州との連絡が絶たれた漳州も自ずと陥落するだろうと予想している。勿論、現実には鄭経が泉州を攻め落としたという事実はなく、やはり前線から離れた沿海地帯では、「船便」を通じて、鄭氏に有利な風聞が伝えられていたようである。その一方、当時福州の兵力が不足していたことは、福建提督楊捷の上奏文でも確認することができる⁵¹⁾。

ついで延宝六年一〇月二六日の「二十五番福州船」の風説書を紹介しよう。この船は「康親王より兵船を遣し取可申」と、清朝の統制下にある福州を八月二六日に出航し、一旦普陀山に寄港して、長崎に入港した船であった。この風説書では、泉州の戦況について、以下のように報告している⁵²⁾。

海澄落し申候、将卒則泉州之城を攻申ために罷登り、同廿日より城を取囲、遠攻に仕罷在候、其内福州康親王より

救ひ之勢を泉州江差越、数度錦舍勢と相戦申候所に、度々福州勢及敗北……城中は将卒人民共に大方百万余も可有御座候に、右之通遠圉に仕、籠城致させ差置申候に付、兵糧につまり、人民餓死仕候事、数十万之由申候、就夫八月十日之比、泉州落城之由風聞仕申候、実正は承届不申候。

これによれば、海澄陥落後、鄭軍は直ちに泉州へと進軍し、六月二〇日から泉州府城を包囲した。これを受けて康親王は援軍を派遣したが、鄭軍との交戦でたびたび敗北を喫している。泉州城内には、凡そ百万人もの軍民が籠城し、補給が続かない中で餓死した人民は数十万人にものぼったという。八月一〇日には、泉州が落城したという風聞も伝わったが、その真偽は不明であるという。福州の沿海地帯においては、鄭氏による攻城戦が激化した八月頃に至り、泉州陥落の噂が流布し始め、福州でも動揺がひろがり、不安な空気が流れていたことがわかる。この風説書は、さらに次のように述べる。

錦舍勢、右之勢ひにて御座候故、尤福州之城にも人民周章申、只今最中糧米薪等、城内へ詰申候而、籠城之覚悟仕申候牀に御座候、泉州さへ落城仕候はば、興化府並漳州府之二府は、攻申に及不申候、其後者福州之城へ攻登可申事、必定に而御座候、福州もたまり申間敷と、諸人ともに申候。

福州では、鄭軍の善戦ぶりが誇大に伝えられ、食糧や薪等の必需品を城中に運搬して、籠城の準備を進めていたという。また福州の人々は、泉州が陥落すれば、興化・漳州府も自ずと落城し、鄭軍は直ちに福州へと迫り、抵抗は難しいだろうと話し合っていたといわれる。このように泉州落城の噂によって、鄭軍の優勢という印象がさらに広がり、福州方面では動揺が深まっていたようである。

(2) 泉州城包囲の解除

本節冒頭で述べたように、福州方面における海戦の失敗によって、鄭氏勢力は八月末に泉州包囲軍を撤収して漳州周

辺の防衛に転向させた。ところが延宝六年二月一日の「二十六番普陀山船」の風説書では、清朝・鄭經の海戦について、次のような事実無根の情報が伝えられている⁵³⁾。

泉州取囲之勢を引せ可申ために、福州康親王より兵船百二十艘、人数一万五六千程に而、林総兵と申者大將に而、錦舍居城之廈門江海手より仕懸け可申とたくみ申候を、先達而錦舍方江、相聞江、即時に兵船二百艘余、人数二万余程、左虎衛の官何鑽と申者大將にて、間もあらせず福州江攻かけ申候処に、福州兵船湊之外江出申事不罷成、湊口におゐて、十一月八日に、両軍合戦に及申候所に、福州勢打負、錦舍方江兵船十二艘、人数共打取、勝利を得申候、泉州取囲之勢、聊引色無御座、爾今困罷在候由承申候。

泉州救援のため、康親王から水師の統率を委ねられた林総兵は、一二〇艘の戦艦を率いて廈門を急襲しようとした。しかし、鄭經は清朝水師の動向を察知し、直ちに何鑽⁵⁴⁾の艦隊を福州河口まで派遣して清軍の出航を封じ込め、一月八日には双方が会戦して鄭軍が大勝を収め、それによつて鄭氏による泉州城包囲網はさらに強化されたという。現実には、この時期には海上では簫琛が敗退し、劉国軒が泉州城から撤回してから二ヶ月が過ぎていた。それでも普陀山方面では、なお鄭氏の優勢を伝える風聞が流布していたようである。

翌延宝七（康熙一八・一六七九）年二月二三日に聴取された「一番普陀山船」の風説書でも、依然として鄭經の優勢が伝えられている⁵⁵⁾。

「漳州・泉州」二府共に福州より軍勢を致扶助候により、容易は落城仕不申候、然共往々は錦舍攻取申にて可有御座候、去年より度々城中より打出、錦舍勢と合戦に及申候得共、錦舍方勝利のみにて福州勢大分に打取申事に御座候、何れ之道にも錦舍方強兵にて御座候。

鄭氏の軍勢に包囲された泉州・漳州の二府は、福州の清軍の支援を受けて籠城を続けている。去年から清軍は度々城を出て鄭氏の陣営に突撃を繰り返したが、いずれも撃退されて大きな損失を蒙っており、鄭軍はまだ優勢を保っていると考えられている。鄭軍による泉州の包囲網が解かれて半年ほど経ったこの時点でも、普陀山方面から来航した海商は、依然

として鄭氏勢力の優勢を伝えていたのである。

約半月後の三月一二日に至り、鄭軍が泉州から撤退したとの情報は、漸く廈門を正月一九日に出帆した「二番思明州船」の華人海商によつて伝えられた⁽⁵⁶⁾。

「泉州府」落城可仕様子に御座候処、韃靼方より之風聞に、海陸両手より錦舍居城之廈門を攻申筈に而、事急成由專取沙汰に付、泉州へ攻寄せ申候勢を、去十月之頃廈門江引取相守り居申候得ば、右之風説偽に而、錦舍も風聞にたばかられ無念に存候得共、引取候以後之事に御座候へば、無是非存罷在候、依夫当春重而勢を泉州へ向い申筈に御座候。

前年の夏には、鄭経は数万人の大軍を率いて泉州府城を激しく攻撃し、落城寸前にまで迫っていた。ところが泉州攻城戦の最中に、清軍が海陸両面から鄭氏勢力の本陣である廈門を急襲するという情報伝えられ、このため鄭経は泉州方面の部隊を急遽撤収し、廈門の防衛体制の増強を図った。しかし後日になって、清軍の廈門来襲は単なるデマであつたことがわかり、鄭経は清朝の術中に陥つたことを知つて、今春には泉州の再攻撃を計画しているといふのである。漢文史料では、上述のように、清朝の林賢が鄭氏の簫琛艦隊を福州沿海で破り、それによつて劉国軒は泉州の包囲を解いて撤退したと記されている。一方、この廈門海商の供述では、簫琛の敗退については言及せず、清朝が廈門襲撃のデマを流し、鄭軍を泉州から撤退させたと述べているのである。

(3) 漳州攻撃と海澄における攻守転換

福州沿海の定海や澄海を拠点に活動していた簫琛の艦隊が清朝の水師に破れた後、鄭経は簫琛の責任を問い処刑し、あらたに艦隊を派遣して、福州南方の海壇島を中心に海上の防衛線を再構築した⁽⁵⁷⁾。一方で泉州から撤回した劉国軒は、海澄を拠点として漳州城に猛烈な攻撃を仕掛け、それに対して清朝は広東の潮州から靖南王耿精忠を漳州方面に呼び戻

して防戦に当たらせていた⁽⁵⁸⁾。戦況が長引くにつれ、鄭氏勢力の後方支援はしだいに行き詰まり⁽⁵⁹⁾、逃亡兵士も続出し、鄭氏勢力は次第に守勢に転じていた⁽⁶⁰⁾。

延宝七年五月二十九日、「三番思明州船」で来日した華人海商は、鄭氏勢力の近況について、以下のように報告している⁽⁶¹⁾。

錦舎事……数ヶ度漳州之本城江仕懸攻見申候得共、大清方之軍兵強勢に而、相守り居申に付、其甲斐もなく勢を取申候、然所に錦舎方兵糧乏く御座候而、逐日軍勢弱く罷成、兵卒共紛散仕候事不知数候事に御座候、依夫大清方弼機に乗り、北京勢を催し十万余福州表より差越、錦舎取罷在候海澄県を只今遠攻に仕罷在候。

これによれば、鄭軍は何回も漳州府城に攻勢を仕掛けていたが、いずれも清朝の強烈な抵抗に遭い失敗に終わった。こうした無駄な出撃によって、元々余裕のない兵糧が続かなくなり、それによる兵士の逃散が続出し、鄭氏勢力は勢いを失って完全な守勢に回ってしまった。一方で清朝は北方からの援軍も加わり、鄭氏が占拠する海澄城に迫っているというのである。

ただし、鄭軍が嚴重に守衛する海澄は容易に陥落しなかった。この華人海商は、現地の人々の次のような戦況認識を伝えている。

錦舎侍大将提督之官劉国賢と申者、能大将に而御座候に付、海澄県之要害三重堀をつくらせ、城之廻りには石火矢を大分備置、寄せ来る勢を石火矢に而防ぎ申により、容易寄せ申事不罷成候、只今之分に御座候はば、海澄県も危き事は御座有間敷と、諸人申事に御座候、錦舎事勢附き申事は限り無御座候得共、右申上候通、兵糧乏く御座候に付、軍勢次第に減じ、只今大方三四万も可有御座と、風聞仕申候。

劉国軒は智謀のある大将で、すでに海澄の周囲に三重の濠を造成し、大量の火器を以て清軍を阻止していた⁽⁶²⁾。廈門の人々のなかには、鄭経に追従する者も依然として多い。それでも兵糧の補給難により、鄭軍の数はかなり減少しているという。

さらにこの廈門海商は、戦時下の廈門における商況についても述べている。

大清勢に被支、福州より糸端物之類、思明州江之通路難成御座候、私船出船仕候迄は、錦舍方に近々出船可仕船見江不申候……錦舍事も申上候通、殊之外兵糧に手つかへ不如意の様子に相見へ申候、就夫今年は広東江船を二艘遣し、広東に而客共之荷物を積、御当地江罷渡申筈に御座候。

清朝との交戦により、江南産の糸・絹織物を福州經由で廈門に運ぶルートが途絶し、鄭氏勢力の海外貿易も停止状態になっていた。事態打開のため、鄭氏は二艘の商船を広東方面に派遣し、そこから船客・船荷を招集して長崎に来航する計画だというのである。実際に、海澄の陥落後、清朝は遷界令の施行を徹底し⁽⁶³⁾、海外貿易に依存する鄭氏勢力の財政事情がかなり悪化していた。六月四日付け「四番東寧船」の風説書にも、「併錦舍も兵糧之く御座候而、兵卒共少々減じ申候段」とあり⁽⁶⁴⁾、さらに七月三日頃に来航した「十番広東船」の海商も、「東寧錦舍事……依夫民家之有徳之者共へ、兵糧之助けと号し、大分課役を被申付候由に御座候に付、万民及困窮に申候由承申候」と述べ⁽⁶⁵⁾、経済的に逼迫した鄭経は、「民家之有徳之者」に対しても重税を課したと報告している⁽⁶⁶⁾。

清朝と鄭氏との長年の交戦状態によつて、閩南地方の田地は荒廢し、鄭氏勢力側だけではなく、清朝側にとつても、七月四日に聴取された「十一番思明州船」風説書に「福州漳州、此所々之大清方も兵糧乏く御座候」とあるように⁽⁶⁷⁾、食糧の確保は喫緊な課題であつた⁽⁶⁸⁾。こうした状況下で、両者の講和交渉が再び始められることになる。

(4) 清朝・鄭氏の講和交渉と北京大地震の風説

延宝七年七月二七日、「十六番思明州船」で来航した華人海商は、清朝朝廷が鄭氏に提示した講和条件について、次のように報告している⁽⁶⁹⁾。

北京康熙帝より福州康親王まで勅使下し被申、其勅使則康熙帝之近習之官蘇氏之者に而御座候、其趣此方大清方思

明州錦舎と毎度及戦乱に限り無之事に候条、互之戦を相やめ、錦舎江は海辺之分其身任に致させ、向後和睦可然候、併錦舎方之者此方領地江往来仕候者、此方之風俗之ごとく剃髪可然候、又往来不仕、思明州に罷在候者之分は長髪に而も其構も無之之由、勅命有之候而。

これによれば、康熙帝は、鄭氏との講和交渉のために蘇氏（蘇鉉）を勅使として福州へ派遣した。蘇氏が福建にもたらした朝廷の講和条件は、①海澄・廈門など、大陸沿岸や島嶼部（海辺之分）の支配の承認、②鄭氏側から大陸に来る人々は、清朝の規定により剃髪する。ただし廈門にとどまる場合は長髪でもかまわない、といった二条だとされている。一方、漢文文献にも、中書蘇鉉が提議した講和交渉について詳細な記録が残されている。ただし漢文史料によれば、清朝が提示した講和条件は、以前と全く変わらず、鄭氏が海澄・廈門を放棄して台湾に戻れば、朝鮮の例に準じて待遇し、澎湖を境に通商を行う、という内容であった。それに対して、鄭氏側は、剃髪や廈門の放棄は考えられないが、海澄を「公所」として双方の共同管理下に置いてもよい、という対案を提示している²⁰。上記の廈門海商の供述では、清朝が提示した条件とされる「海辺之分」における鄭経の支配権の承認や廈門での剃髪免除は、むしろ鄭氏勢力側の要求に近いといえる。

さらに講和の具体的な交渉過程については、廈門海商は次のように報告している。

則右之蘇氏之者と、並に康親王之手下之官一人思明州為案内、而使当十五日に思明州江被致着地、右之趣錦舎江被申入候所に、錦舎並諸官共に此儀幸と存、和睦之評議致決定、為其領承と錦舎手前より賓客司之官傅氏之者を勅使に差添、福州康親王方に遣し申答に御座候、其上にて福州之副主部院之官蘇氏之大官重而思明州江下り、弥右和睦之首尾相究、北京康熙帝江返奏仕答に御座候、今度之評議相違は御座有間敷候、依夫思明州之人民も天之助け哉と、上下悦申事に御座候。

蘇氏は康親王配下の一人の官員を伴って七月一五日に廈門に到着し、鄭経に上述の講和条件を伝えた。鄭経と配下の重臣らも講和交渉に同意し、返答のために賓客司の傅氏を福州に派遣する予定である。その後は、まず福建総督と蘇氏が

再び廈門に渡り、講和の具体的な事項を確認し、また帰京して康熙帝に交渉の結果を奏上する見込みだという。鄭經による苛斂が益々深刻化する中、廈門の人々は、今回の講和交渉の成功に多大な期待を持っていたようである。「十六番船」以降の『華夷変態』所収の風説書には、この講和交渉に関する言及は全くなく、それらの風説書だけでは、交渉の経緯は確認できない。なお漢文史料によれば、鄭氏の使者としては、確かに賓客司傅為霖が福州に赴いていたが、清朝の使者として廈門に渡ったのは蘇鉉本人ではなく、彼の甥である蘇垚となっている。いずれにせよ、双方の要求の隔たりは余りにも大きく、傅為霖が福州から帰った後、海商らが述べるような後続の交渉は実現せず、講和交渉は失敗に終わったのである。

ただし『華夷変態』には、長崎に来航した海商の風説書がすべて収録されているわけではなく、延宝七年度の風説書のなかでは、「十六番船」の後には、「二十番東埔寨」・「三十二番普陀山」・「三十三番普陀山」の三通の風説書を収めるにすぎない。このうち二艘の普陀山船の風説書は、いずれも北京で起こった大地震の情報伝えている。まず延宝七年一月九日に聴取された、「三十二番普陀山」風説書を見てみよう⁽¹⁾。

大清帝都之北京、当七月廿八日より八月三日迄五日之間大地震仕、一日之内二三度宛、或は一時、或は二時程致震動、夥數さわざ申候、内々禁城を懸候而、其筋に二里程之間大地われ申候により、城之構も數百丈崩れ申候、則地中より洪水わき出、諸官人民ともに、或は致溺死、或は亢に落ち入、又は物にあたり死し申候者十萬餘之由申候……今度之地震、大清之末運に而も可有御座候哉と、諸人申事に御座候。

北京では、五日間にわたって、一日に二・三回ほど続く大地震が発生しており、大地が大きく亀裂して城壁も數百丈ほど崩落した。そして地中から洪水が流出し、溺れや下敷きなどで數十万人の死者が出た。このため今回の地震は、清朝の亡国の前兆ではないかとの風聞も流れているという⁽²⁾。

つづいて一二月二三日付けの「三十三番普陀山船」風説書では、北京の地震を好機として、反清勢力の動きが活発化しつつあると述べている⁽³⁾。

「吳三桂」右北京之慘事を承、能時節と存、湖広へも人数残し置、強兵数十万引分け、陝西へ攻登り申候所に……右陝西を攻通り、山西へ攻かかり、山西より北京へ攻寄可申覚悟之由に御座候……在京之勢存儘無之に付、無是非福州に罷在候康親王へ早飛脚に而、早々北京へ登り被申候様にと申来候に付、則去八月に人数一万程にて、福州を致出軍……左候得ば、福州も康親王立去り被申候ば、少々守護之勢よわく罷成可申候間、錦舎方より攻登り可申哉と、諸人申事に御座候。

地震の情報を知った吳三桂は、陝西から山西に侵入、さらに山西から北京を攻撃する計画を立て、直ちに十数万の軍勢を率いて湖広から陝西へと攻め込んだ。このため北京の朝廷は、吳三桂の襲来に備え、福州の康親王を召還することを決定した。それを受けて康親王は八月に一万の兵士を連れて福州を離れたため、人々は鄭経が必ずや福州の空虚に乗じて攻勢に出るだろうと予測しているという。実際には、吳三桂は前年の康熙一七年八月一日にすでに死去していた。しかしこの普陀山海商が、「吳三桂事も此之間は相果申候と、風聞仕申候得共、其段ははかり事にて、左様に申ふらし、吳三桂は未存生之風説も御座候」と述べるように、吳三桂の死去は清朝が流した風聞であり、実際には吳三桂は健在だと説く者もあり、浙江沿海部では内陸部の状況について、情報が錯綜していたようである。

四 廈門の放棄と台湾への撤収

延宝八（康熙一九・一六八〇）年三月二十八日、「一番普陀山船」の海商は、鄭氏勢力の動向について、「当正月末に漳州之本城並泉州府を手いたく攻申候所に、無程二府共攻取申候」と、泉州・漳州二府がすでに鄭氏の激しい攻撃を受けて落城した、という全く事実無根の情報を伝えている⁷⁴。ただしこの風説書では、鄭経は両府を攻略したものの、「第一兵糧爾今乏く御座候間、漳泉之二府持こたへ間敷と諸人申候」と、兵糧の補給が続かないため、長期の占領は非常に

困難であるという観測も示している。

しかし、その一ヶ月程後には、「二番普陀山船」が長崎に入港し、「今度廈門落城之便りは、私船之旦那錦舎手之水師朱総兵と申者、鏜山に罷在候、此者方より四月六日に飛船差越候而申聞せ候」と述べ、この商船の「旦那」であり、最前線の鏜山に駐屯していた朱天貴からの急報によるとして、鄭経がすでに廈門を放棄して台湾に撤退したことを伝えている⁷⁶。これによれば、鄭成功配下の武将でありながら清朝に投降した施亥は、清朝から下級官員に任じられ泉州に赴任したが、康熙一三年に鄭経が泉州を攻略した際、再び鄭氏勢力に投降して鄭経の寵愛を受けていた。ところが彼は実際には清朝に密通し、鄭経に「大船之分は広東之内高州と申所へ兵糧調に遣申」と、食糧調達のために大型戦艦を広東高州へ派遣することを建議し、廈門の戦力分散を図った。彼の阿諛迎合に騙された鄭経がそれを実行に移した後、施亥は主力戦艦の不在による廈門の脆弱な防備体制を清朝に密告し、水陸の大軍による来襲を導いた。これによって鄭経は、「不存寄儀に御座候へば、俄に驚申、防ぎ可申と仕候へ共、兵船共は高州へ遣し申候故、折節兵船無之、防ぎ可申様無御座候而、無是非残り有之候兵船百余艘に軍大将二十五頭、人数一万余取乗、二月二十六日に廈門を立退申候」と、清軍の急襲に不備を突かれ、多くの戦艦がまだ高州に滞留しているなかで、防戦らしい防戦もできずに、やむをえず百艘余りの兵船に、一万程の残留部隊を乗せて廈門から撤退したというのである。

この風説書では、鄭経は廈門から台湾に撤退させたのは、清朝と密通した施亥の策謀であつたとされている。一方で、漢文文献では、鄭経が台湾に撤退する経過を、おおむね次のように述べている⁷⁶。清朝福建水師提督の万正色は、艦隊を率いて海壇を侵犯し、鄭経は林陞を水師提督に命じて防戦させた。両軍は海壇で一戦を交え、鄭軍は勝利を収めたが、海壇を離れて外洋に出たため、清朝の陸軍が嚴重に守衛していた沿海地方での補給ができず、林陞の一存で、一旦金門の料羅湾に廻航することになった。ところが、林陞からの捷報が鄭経に達していたにもかかわらず、料羅への撤収は、隣接する廈門で大きな不安を引き起こし、林陞が敗戦して金門に撤退し、鄭経からの処罰を恐れてわざと勝利の報告を行ったというデマも流布しはじめた。廈門の動揺に対応するため、鄭経は海澄の軍隊を廈門に撤収することを劉国軒に

命じ、それに乗じて清軍は海澄を攻落した。海澄の喪失は廈門の動揺をいつそう募らせ、收拾不能の状況に陥った鄭經は、止むを得ず廈門から台湾に撤退したのである。

なお上記の施亥についても、漢文史料に関連する記録が残されている⁷⁶。それによると、施亥は姚啓聖と密かに通じ、鄭經を泉州に拉致しようと図っていたが、劉国軒にその計略を見破られ、鄭經が廈門を放棄する数日前に一族と共に処刑されたという。

一方、「二番普陀山」の風説書にも、この施亥をめぐる、次のような記述がある。

「劉国軒」海澄より廈門へ引取申候道にて、不審成飛脚之者を見懸け申候付、捕得申候而穿鑿仕候へば、韃靼方より施亥へ之密通之返礼さがし出申候、依之廈門へ着仕候と即時に施亥を捕へ申、劉国賢自分之船に乗せ申、廈門近所之鐘山と申所迄退申、施亥逆心を起申候段錦舍へ訴申候へ共、錦舍承引不仕候故、右さがし出し申候密通之返礼を取出し、錦舍へ見せ申候へば、錦舍も無是非之存、劉国賢に申付、鐘山にて誅罰仕候、錦舍事は東寧に引取、軍兵共を集め申、重而時節を相待被申由に御座候。

劉国軒は、清朝が施亥に遣わした密使を、海澄から廈門に撤退する途中で逮捕し、それを証拠に施亥の身柄を拘束し、鄭經にその件を報告した。しかしながら、鄭經は当初施亥の変節を信じず、劉国軒が証拠を見せたため、漸く施亥の処罰を決定したという。

つづいて、長崎に入港した「三番東寧船」の海商は⁷⁸、次のような弁解めいた供述を行っている。それによると、鄭氏勢力は「二月十九日に大清兵船と一戦仕申候処、互勝負無御座候、人数も損じ不申候」と、清朝の水軍と二月一九日に海上で会戦したが、勝負は決しなかった。そして「兎角廈門斗相守候而も詮も無之事に候間、先々東寧へ引取、時分を考え、兵糧等を集め、重而大挙を企可申とて、二月二十六日に兵船大小二百艘余、人数一万余、其外錦舍方にもより之人民共、悉く東寧へ引取申候」と、これ以上廈門を固守することも難しいと判断し、一旦台湾に戻って十分な兵糧を確保し、再び大陸を攻略することを意図して、みずから廈門から撤退したというのである。

「三番東寧船」の海商も、「二番普陀山船」と同じく、鄭経が施亥に騙されたことは認めている。しかしこの台湾海商は、「縦兵糧之く御座候而も、小地なりとも、廈門は立のき不申筈に御座候得共」と、廈門を放棄するまで情勢が悪化していたわけではなく、ただ「兵船軍兵共に諸方へ令分散候へば、俄大清攻よせ候ては難防御座候により、右之通先東寧へ引取申候」と、鄭氏側の船艦が各地に散開したため、廈門の海防が手薄になり、台湾に撤退せざるを得なかったのだという認識を示している。

本節では鄭経の台湾撤退をめぐる、唐船風説書の叙述を紹介してきた。鄭経の撤退の契機については、漢文文献では、万正色との海戦での林陞の失策を挙げるのに対し、唐船風説書では、清朝に密通した施亥の策謀を主因としている。漢文史料によれば、廈門放棄の責任は、林陞が海壇から敗退したと軽信した鄭経や、鄭氏の重臣である馮錫範に帰されることになる。しかし鄭氏配下海商の風説書によれば、清朝と密通する施亥に謀られ、清朝の襲来を防ぐだけの戦艦を失った鄭氏勢力は、やむなく撤退にいたったことになる。あくまで推測にとどまるが、こうした情報が流れた背景には、もともと直接の関係はなかった施亥の謀反事件と廈門の放棄とを結び付け、鄭氏勢力指導部の責任を、処刑された施亥に転嫁して、鄭氏勢力中枢の求心力を保とうとする、鄭氏勢力内部での意図もあったのではないだろうか。

おわりに

大陸から廈門に一旦撤退していた鄭氏勢力は、漳州湾沿岸に反攻して海澄城を攻略し、二年間にわたり清朝との攻防を続けた末、海澄・廈門を放棄して台湾に撤収した。本稿では『華夷変態』所収の唐船風説書により、長崎に来航した華人海商が、この海澄包圍戦の戦況をどのように認識していたのかについて、通時的に検討してきた。当時は清朝が厳格な海禁政策を施行していたため、長崎に来航した唐船は、鄭氏勢力の支配地域から出航したものや、遷界令により清朝に放棄された普陀山を経て密航したものに限られていた。鄭氏勢力の本拠地から出航した海商が供述する戦況の推移

は、おおむね漢文史料とも符合している。ただし特に鄭氏側の勝利を伝える際には、漢文史料に記される以上に鄭氏勢力の軍略や優勢を強調し、鄭氏側の敗報については、清朝の奸計に陥ったと説くような傾向は認められる。これに対し、鄭氏の本拠地から遠い福州や普陀山を出航した海商は、実際とはかけ離れた、反清勢力に有利な情報を伝えることが多かった。

閩南地方を中心とする鄭氏と清朝との激戦地においては、三藩の乱勃発後の短期間に、支配勢力が耿精忠・鄭經・清朝・鄭經と頻繁に交替し、人心の動揺や治安の混乱も顕著であった。当時の福建の社会情勢について、康熙帝により福建総督に任じられた姚啓聖は、「海澄の陥落後、兵士は鄭軍に恐れをなし、人民も不安を募らせている。各地で叛乱も頻発し、鄭軍の勢いを見て投降する者も多い」⁷⁹と述べている。また、鄭氏勢力による内陸部への進攻については、「賊軍は海澄を拠点に、平和・漳平・長泰・同安など十県を攻略し、泉州に迫っている。鄭軍に投じる者も日々増加している」⁸⁰と伝えている。しかし、一旦鄭軍が劣勢になると、兵站が続かなかったこともあって、兵士の逃亡や人心の離散も拡大していったのである⁸¹。

このような状況下で、鄭氏側も清朝側も、自軍に有利な戦況を喧伝し、敗報をできるだけ隠蔽することにより、士気の高揚や人心の収攬を図ることに努めたと考えられる。たとえば清朝側は対吳三桂作戰における岳陽・長沙攻略の捷報を、速やかに福建方面にも流布させ、内陸部における清朝の軍事的優勢を周知させようとしている⁸²。このような両軍による戦略的な情報操作に加え、鄭氏支配下の地域や、鄭氏とかかわりの強い海商の中では、鄭氏側に有利な風説が自然発生的に生じることもあっただろう。それらが相まって、長崎に来航した海商たちも、鄭氏の軍事的優位を実際以上に強調する情報を伝える傾向があったのだと思われる。

註

- (1) 耿精忠が鄭經への書簡において、鄭氏の行動を「怯公戰而勇私闘」と評したという。江日昇『台湾外記』卷六（康熙四三（一七〇四）年序、台湾文献叢刊第六〇種、台湾銀行經濟研究室編印、一九六〇年）二八四頁参照。
- (2) 張蔭『鄭經鄭克塽紀事』（台湾研究叢刊第八六種、台湾銀行經濟研究室編印、一九六六年）四頁。
- (3) 川口長孺『台湾鄭氏紀事』卷之下（文政一一（一八二八）年序、台湾文献叢刊第五種、台湾銀行經濟研究室編印、一九五八年）。
- (4) 宮崎来城『鄭成功』（大学館、一九〇三年）二二三～二六六頁、稲垣孫兵衛『鄭成功』（台湾経世新報社、一九二九年）五二六～五四七頁。
- (5) 林田芳雄『鄭氏台湾史—鄭成功三代の興亡実紀』（汲古書院、二〇〇三年）八七～九〇頁。
- (6) 黄玉齋「明延平王世子鄭經在閩浙沿海的抗清」（『台湾文献』一六卷四期、一九六五年）、宋增璋「三藩之役鄭經西征始末」（『台湾文献』二七卷三期、一九七六年）。
- (7) 李鴻彬「鄭經与三藩之乱」（『台湾研究集刊』一九八四年第四期）、張仁忠『六十年風雲…鄭氏四世与台湾』（九州出版社、二〇〇〇年）一八五～一九二頁。
- (8) 拙稿「唐船風説書に見る鄭經の「西征」」（『九州大学東洋史論集』第四二号、二〇一四年）。
- (9) 『靖海志』卷四、八二頁、阮旻錫『海上見聞録』（台湾文献叢刊第二四種、台湾銀行經濟研究室編、一九五八年）卷二、五二頁、『台湾外記』卷七、三一九頁、夏琳『閩海紀要』（台湾文献叢刊第一一種、台湾銀行經濟研究室編、一九五八年）卷之下、五二頁。
- (10) 『台湾外記』卷七、三二二頁、「康親王」船隻一時未得応付」。
- (11) 北京においても、「朱三太子」と名乗る楊起隆の乱があり、これについて細谷良夫「三藩の乱をめぐる…呉三桂の反乱と楊起隆・朱三太子事件」（『戦争と平和の中近世史』青木書店、二〇〇一年）が詳しい。また、蘇同炳「朱三太子的風波」（『紫禁城』

二〇〇九年七期)によれば、山東省においても、「朱三太子」と自称した人物が清朝に逮捕されたという。当時、反清朝の勢力を結集するため、明朝の正統的な継承者とされる「朱三太子」の名義は屢々反乱側に用いられていた。

- (12) 当時、福建總督の任にあった姚啓聖は、康熙一七年六月の「請兵援剿」(『總督福建少保兵部尚書姚公奏疏』陳支平主編台灣文獻匯刊第二輯『閩頌匯編』第一冊、九州出版社・廈門大學出版社、二〇〇四年)において、「切照上年、王師入閩……独泉漳二府、雖入版圖、而內山外海、如賊寇有船者逃出廈門、不及下海者、竄入山中、此時不暇掃除、致夏秋之交、有山賊蔡寅等嘯聚數百人、鷓鴣于內(二四七頁)」と回顧し、蔡寅の兵力を數百人と過小評價もしているが、彼らによる騷擾の深刻さをも語っている。また、『海上見聞錄』卷二、五二頁、『台灣外記』卷七、三二六頁を参照。

- (13) 『華夷變態』(東洋文庫樓一雄編、東方書店、一九八一年)卷五、一八八頁。なお、六番思明船に搭乗する海商は鄭氏の長崎奉行への書簡を持参しており、鄭氏勢力の配下の商人に違いない。

- (14) 『台灣外記』卷七、三二一〜三二三頁、「于三月十九日夜半、寅領八十二夥頭、各書符一道、潛至泉州城下……寅見無応、隨轉身砍西門逸去、無一失者、自是人益信其神」とあり、蔡寅が一人も損失せずという風説書の記載とは符合する。

- (15) 前掲註一二、姚啓聖上奏文を参照。

- (16) 『台灣外記』卷七、三二二頁。前掲注五、林田著書、一三五頁、参照。

- (17) 『華夷變態』卷五、一九二頁。

- (18) 朱都督は、朱天貴(一六四七〜一六八三)のことを指すと思われる。楊捷「請調官兵咨兩院 康熙一七年一〇月三日」(『平閩紀』卷五、康熙三二年自序、台灣文獻叢刊第九八種、台灣銀行經濟研究室編印、一九六一年)には、「今浙賊又有偽鎮朱天貴、劉天福、劉祖漢、陳義等自北而下」とあり、康熙一七(延宝六)年一〇月ごろまでに、朱天貴の艦隊が浙江方面に駐在していたことが分かる。

- (19) 『華夷變態』卷五、一九三頁。

海澄攻防戦(一六七八〜一六八〇)をめぐる清朝と鄭氏勢力(郭)

- (20) 『平定三逆方略』卷二九、康熙一六年三月乙未条。
- (21) 『平定三逆方略』卷二九、康熙一六年三月甲午条。
- (22) 『平定三逆方略』卷三一、康熙一六年六月壬子条。
- (23) 『平定三逆方略』卷三一、康熙一六年六月庚午条、「[劉進忠]後果与耿精忠等謀為不軌、頼大兵有備、狡謀莫逞。不然則久留潮州、倉猝突起、又煩王師撲剿」。
- (24) 『華夷変態』補遺、松平家本卷一、二九九七～二九九八頁。
- (25) 前掲注五、林田著書一三五～一三七頁、参照。
- (26) 『台湾外記』卷七、「康熙一六年」四月、諸鎮聚集一島、軍資不給。繩武啓経、分諸鎮沿海駐筭、就地取糧、経允其請……楼船中鎮蕭琛、守定海地方」とあり、定海が鄭氏の支配下にあったことが分かる。
- (27) 楊捷「密陳平海啓 康熙一八年四月二六日」『平閩紀』卷四、一〇二頁、「況内地奸民、反側無常、一聞議撫、以為海賊將復得志也、則群趨而附之」。
- (28) 楊捷「敬竭愚忠等事疏 康熙一七年七月一二日」『平閩紀』卷一、一一頁、「且先経従逆、与賊声氣相通」。
- (29) 以下、海澄包圍戦の経過については、特に注記しない限り、主として前掲注二、張葵著書、前掲注五、林田著書、及び『台湾外記』・『清聖祖実録』・『平定三逆方略』・『閩頌匯編』の關係記述に基づいてまとめた。
- (30) 『平定三逆方略』卷三八、康熙一七年六月乙未条、「大兵四路攻進、賊以火器拒戦、我師退、賊又用砲攻撃海澄」。
- (31) 『華夷変態』卷五、一九五頁。
- (32) 『華夷変態』卷五、一九九～二〇一頁。
- (33) 『台湾外記』卷八、三三二頁、「姚儀、啓聖子、有膂力、武芸嫺熟、従啓聖出征、屢著功」。
- (34) 一ヶ月ほど後、敗戦のショックを受けた黄芳世は病死してしまった。『平定三逆方略』卷三七、康熙一七年五月庚子条を参照。
- (35) 『台湾外記』卷八、三三六頁。

- (36) 『台湾外記』卷八、三四〇頁。
- (37) 『華夷変態』卷五、二〇三頁。
- (38) 楊捷「用荷蘭議啓 康熙一七年九月二八日」『平閩紀』卷四、九三頁、「大將軍康親王等身在地方、或於目前用荷蘭国之兵夾剿海賊、或於何年定期用荷蘭国之兵夾剿金門、廈門等處問明馬珍西氏定議具題」を参照。
- (39) 『平定三逆方略』卷三七、康熙一七年四月戊子条には、「郎廷相則奏請調募舟師規取廈門、不合、俱不準行」とあり、海軍を以て直接に廈門を襲撃する計画もあつたことが分かる。
- (40) 『華夷変態』卷五、二〇五～二〇六頁。
- (41) 『華夷変態』卷五、二〇七頁。
- (42) 『華夷変態』卷五、二一二頁。
- (43) 『華夷変態』卷五、二二〇頁。
- (44) 『華夷変態』卷五、二二三頁。
- (45) 『華夷変態』卷五、二二〇～二二一頁。
- (46) 『台湾外記』卷八、「海澄給兵黃藍、不知所之、有伝其死於乱軍者、有伝其溺於水者」。
- (47) 当時の清朝知県は、祝文郁という人物であつた。『台湾外記』卷八を参照。
- (48) 以下の記述は、主に前掲注二、張莢著書に依拠してまとめた。
- (49) 楊捷「飛報出洋等事疏」『平閩紀』卷一、一七頁。
- (50) 『華夷変態』卷五、二七五頁。
- (51) 楊捷「酌調官兵等事疏 康熙一七年八月一日」『平閩紀』卷一、一五頁、「漳泉寇衆侵犯日甚、抽調各路兵馬救援、征發殆尽」。
- (52) 『華夷変態』卷六、二七六～二七七頁。
- (53) 『華夷変態』卷六、二七八～二七九頁。

海澄攻防戦（一六七八～一六八〇）をめぐる清朝と鄭氏勢力（郭）

- (54) 阮旻錫『海上見聞錄』卷二（台灣文獻叢刊二四種、台灣銀行經濟研究室編印、一九五八年）には、「祐、綽号何錐子」との記述があり、「鑽」と「錐子」とは同様な意味を有するため、ここの「何鑽」は何祐のことを綽名で示したものと思われる。
- (55) 『華夷変態』卷七、二八三頁。
- (56) 『華夷変態』卷七、二八七～二八八頁。
- (57) 『台灣外記』卷八、三四八頁、「召籙琛回廈、斬之。令援剿左鎮陳諒……等守海山御敵」。また姚啓聖「請調戰船 康熙一七年二月七日」『閩頌匯編』第一冊、四五〇～四五一頁、「鄭經將在浙朱天貴等船二百余号俱調集海壇、以堵我師南下」。
- (58) 『台灣外記』卷八、三四九頁。
- (59) 姚啓聖「飛催進兵 康熙一七年一〇月五日」『閩頌匯編』第一冊、三八三頁、「海澄廈門原無產米之地」。
- (60) 前掲注二、張莢著書、一三一～一三二頁を参照。
- (61) 『華夷変態』卷七、二九一～二九三頁。
- (62) 姚啓聖「請減大兵 康熙一八年六月」『閩頌匯編』第一冊、四九二頁、「海賊慣習波濤、舟師是其長技、即今窃踞海澄・灣腰樹等処、亦皆引潮水入内地、鑿池挖濠、重重溝窟、密密城寨、為固守計、実非馬騎所可衝突」。
- (63) 前掲注二、張莢著書、一三〇頁。
- (64) 『華夷変態』卷七、二九四頁。
- (65) 『華夷変態』卷七、二九七～二九八頁。
- (66) 前掲注二、張莢著書、一三二頁を参照。
- (67) 『華夷変態』卷七、二九八～二九九頁。
- (68) 楊捷「檄副將朱起龍 康熙一八年四月二八日」『平閩紀』卷一〇、二九三頁、「山東・河南からの清朝援軍」飢餓難忍、求借無門、故爾脱逃」。
- (69) 『華夷変態』卷七、三〇一～三〇二頁。

- (70) 前掲注二、張葵著書、一三四頁、前掲注五、林田著書、一三八～一四〇頁、などを参照。
- (71) 『華夷変態』巻七、三〇四～三〇五頁。
- (72) ここでの地震の発生日や地面の亀裂、城壁の崩落、地中からの湧き水などについての叙述は漢文文献とは全く一致している。
- 劉志剛「康熙十八年京師大地震与政府反応」、『歴史教学』二〇〇八年二〇期）などを参照。
- (73) 『華夷変態』巻七、三〇六～三〇七頁。
- (74) 『華夷変態』補遺、松平家本巻二、三〇〇一頁。
- (75) 『華夷変態』補遺、松平家本巻二、三〇〇二～三〇〇四頁。
- (76) 前掲注二、張葵著書、一三七～一三九頁、前掲注五、林田著書、九〇頁。
- (77) 前掲注二、張葵著書、一三六～一三七頁を参照。
- (78) 『華夷変態』補遺、松平家本巻二、三〇〇五～三〇〇六頁。
- (79) 姚啓聖「恢復平和」、『閩頌匯編』第一冊、三〇二頁、「海澄失陷、兵氣懾怯、民情風鶴、在在豎旗起賊、处处望風投順」。
- (80) 姚啓聖「特広招撫条例 康熙一七年一日」、『閩頌匯編』第一冊、三六〇頁、「賊踞海澄、並陷平和・漳平・長泰・同安等十県、直犯泉州、附和賊衆日益繁多」。
- (81) 村上衛『海の近代中国―福建人の活動とイギリス・清朝』（名古屋大学出版社、二〇一三年、一～二頁）において指摘されている、利益に向かってバラバラの人々が群がり、その対象が磁力（魅力）を失えば、人々はまたバラバラになる、という沿海民の「散沙」現象を想起されたい。
- (82) 楊捷「暁諭合属土民 康熙一八年二月二三日」、「暁諭泉属 康熙一八年二月二五日」、『平閩紀』巻一二、三五〇～三五二頁。